取材ノート

広報担当者が独自に取材した地域の取組み、活動等についてお届けします。

問市長公室シティプロモーション・広報担当（☎594-5505）

顔の見える関係をつくる子ども食堂「すまいる食堂」

近年、よく耳にするようになった「子ども食堂」。その定義は、〝NPO法人やボランティア団体等が子どもなどに対し、無料または低額で食事を提供する〟とされています。

7月9日、コミュニティセンターで開催中の子ども食堂「すまいる食堂」にお邪魔しました。こちらは、料理サークルすまいる北本の皆さんとNPO法人上尾明るい社会づくり運動の皆さんが協力し、昨年5月から毎月開催しています。

お邪魔したのは午前10時半過ぎ。調理室では、すまいる北本の皆さんが手分けして、カレーやコールスロー、フライドポテトなどの調理を行っていました。

「自分たちでメニューを考えて当日調理をしているんです。その他にも食材やお菓子を寄贈いただいたりするんですよ」

こう話すのは、NPO法人上尾明るい社会づくり運動の理事長・中山時次（ときつぐ）さんです。これまではお弁当を提供する形でしたが、今回から会場で食事もできるようにしたとのこと。

「コミュニティづくりが目的なので。スタッフが子どもたちと遊んだり、勉強を教えたり。相談に乗りたいって人も居るんです」

スタッフには高校生ボランティアや元教員もおり、学校の相談等に乗っているそうです。この日、毎月すまいる食堂に来ているというお母さんに話を聞くことができました。

「子どもが学校に行かない時期があり、すごく悩んでいたんですけど、皆さんに相談に乗ってもらって。受験のことも、教員経験者の方に話を聞いてもらって、無事高校に上がれました。すごく精神的に支えてもらったなと思っています」

毎月30組まで申込みを受け付けるすまいる食堂では、一度申し込んだ人に翌月の開催日を案内します。そうすると、継続的に来てもらえるようになり、子どもたちやその家族とスタッフの皆さんとの間に顔の見える関係ができるようになっています。

先ほどのお母さんのお話を、副理事長の坂本一江（かずえ）さんにお伝えすると、顔をほころばせてこう話してくださいました。

「そんな風に言ってもらえて、こちらが元気をもらえますね。私たちはもう腰も曲がってますけど、こうやって色々な人の協力でこの活動ができてる。徐々に私たちも来ていただいた皆さんと一緒にご飯を食べたりできるようになったらいいなと思います」

食事を提供するだけでなく、そこに来る人たちと顔見知りになり、相談に乗ったり、一緒に遊んだりする。そういう関係を築いていくのも、子ども食堂の在り方の一つ。北本らしい子ども食堂の一つの形がここにありました。

市内の子ども食堂について

市内では、子ども食堂などさまざまな子どもの居場所があります。北本市社会福祉協議会では、子ども支援を行う団体のネットワーク会議「きたもとBASE」を開催し、各団体への活動支援とともに、ネットワーク構築、情報共有、協働でのイベントなどを行っています。子ども食堂や子どもの居場所についてお気軽にお問い合わせください。

問社会福祉協議会（593-2961）

メジナ釣り日本記録保持者
（ラインクラス：6kg・10kg）
釣りエサのエキスパート

長岡 寛（ひろし）さん（石戸在住）

魚は絶対に思い通りにならない。だからこそ、工夫しがいがある。

長岡寛さんは釣り一筋50年、魚が好むエサの成分や魚の特性に科学の視点から迫る、釣りエサのエキスパートです。釣り餌メーカー在職時に開発に携わったエサは、今も釣り餌界のスタンダードであるといいます。

「釣りで一番重要なのは、魚が目の前のエサを食べてくれるかどうか。だからエサが美味しいと思われるかどうかが一番重要なんですよ。じゃあ、魚はどうやってエサの味や臭いを感じているのか。魚にはエサがどう見えているのか。それを研究して、工夫して、探っていく。これがうまくはまった瞬間が一番面白いところです」

長岡さんが釣りを始めたのは小学1年生の時のこと。当時都内に住んでいた長岡さんは、父親に連れられて、公園の池などで釣りをしていたのだそう。

「当時は釣りを禁止しているところも少なかったので、公園の池には釣りを楽しむ人たちのコミュニティみたいなものがあって、自分もそこに混ざるような形で釣りにのめり込んでいきました」

釣りに夢中になった長岡さんはその後、北里大学水産学部の食品科学科へ進学。成分分析の手法などを学び、釣り餌メーカーへ就職。釣り餌の成分分析ができる開発環境をほとんどゼロから構築していきました。

「データを集めて色んなものを開発できる環境を整える必要がある、と思ったんです。エサだけじゃなくて、土に還る生分解プラスチックのワーム（疑似餌）の開発とか、釣りにまつわることならなんでも取り組んできました」

会社を退職した現在は、個人での釣り餌・釣り具開発の傍ら、釣り雑誌での執筆や、学校での講義や実習などで釣りの面白さを広く伝える活動をしています。

「釣りの話、というと趣味感が強く聞こえますけど、釣りに惹かれない人もいる。でも全然構わないんですよ。例えば、魚はどうやって水面を見ているのか、耳はどこにあるのか、とか。何かに疑問を持って調べてみる。そういう体験のひとつとして、楽しく話を聞いてもらえたら嬉しいですね」

もっと、子どもたちに魚の面白さを知ってもらいたい。

そう語る長岡さんの著書『釣りエサのひみつ』では、写真から標本、挿絵のCGイラストにいたるまで、そのほとんどを自身で作成しています。やってみる、調べてみるという研究マインドが、ここにも生かされています。

「今後はもっと地元での活動を広げたいと思っているんです。特に子どもたちに魚の面白さを知ってもらいたくて。興味を持ってもらうための話し方も毎回工夫しているんです」

長岡さんの釣りへの情熱はきっと誰かの好奇心に火をつけていくはずです。

長岡さんの著書『釣りエサのひみつ』と、開発したウキや釣り餌。挿絵やパッケージイラストも自作。